

思い出とともに

大槻イマ子

福島赤十字病院産婦人科病棟

久しぶりに受話器の向こうに田中みどりさんの声を聞き、懐しさでいっぱいになりました。みどりさんは、助産婦学校の1年間と日本赤十字幹部看護婦研修所の1年間と一緒に学んだ友達です。とくに研修所では、お互いに子供や家庭を忘れ伸び伸びと勉強ができました。

久しぶりのみどりさんからの電話は「りれー随筆」の依頼でした。毎月楽しく拝読させていただいている「りれー随筆」に、まさか私自身が登場するとは夢にも思っていませんでした。文章を書くのが苦手な私ですが、頼まれればいやとはいえない性格で引き受けることになりました。

生命の誕生にたずさわりたい

私は、日本赤十字中央女子短期大学を卒業後、地元の福島赤十字病院に勤務しました。病院は福島市の近郊にあり、前方には福島競馬場、後には信夫山、ちょっと足をのばせば磐梯山と、風光明媚な所にあります。福島は果物が豊富に穫れ、とくにりんごの「富士」は絶品です。

最初の勤務場所は外科病棟で、2年目は手術室に配属されました。手術室勤務の時には、夜中の緊急帝王切開というと、寮住いの私はいつも呼び出しをうけ器械出しをさせてもらいました。そのとき産婦さんの側にいたのが助産婦さんでした。陣痛で苦しむ産婦を励まし、仮死状態で産まれた新生児を上手に蘇生する姿にとても感激しました。緊迫した中で働く助産婦の仕事にひかれ、助産婦の道を選びました。

入職して3年目に、日本赤十字社助産婦学校に第33回生として入学しました。個性豊かな40人の学生をお世話して下さったのが、教務部長の平澤美恵子先生で、現在は日本赤十字看護大学の教授としてご活躍中です。先生はとてもやさしく、行なったことに対しては必ず適切な評価をしてくださいました。先生には、つねに助産婦は素晴らしい専門職であること、学問的な裏づけをしっかりと持って仕事することの大切さをご教示いただきました。先生のご指導の熱意に打たれ、グループワークにあけくれ、よく勉強させていただいた1年間でした。

入学早々から妊婦さんの保健指導の原案作りをグループに分かれて行ないました。単に従来の資料をまとめるのではなく、妊婦さんの現実の生活に即した資料を作るために、官庁に出かけたり、デパート巡りをして資料をまとめました。当時はワープロなどもなく、すべて手書きでした。夜中に印刷機が壊れてしまい、明日の発表に間に合わない、あわてて先生を呼び出して大変迷惑をかけたことを今も申し訳なく思っています。

指導案づくりが終わると母親学級の運営です。7～8人の学生で1グループを作り、8回にわたり母親学級を担当するのです。指導要項やテキスト作り、会場準備まですべてを学生が担当できるのがとても楽しく、貴重な体験でした。ここで入学早々に苦労して作った指導案が大変役立ちました。

忘れられないのが分娩室実習でした。1週間分娩室に缶詰状態になります。産婦を入院時から退

GRAVES



Toshiko.

院まで受け持ちます。自分の担当産婦さんの分娩の合い間に仲間の分娩時のラウンドも手伝います。分娩後の産褥経過の観察、新生児経過の観察を通して、多くのことを学びました。ほとんど眠る時間もない1週間で体力的な限界を感じましたが、学生時代にしかできない貴重な体験でした。土曜日の交替時はうれしくて、睡眠不足や1週間お風呂に入っていないことも忘れて、夜中の六本木に出かけました。飲んで食べて、そうすることで実習中の疲れやお互いのわだかまりもとれました。

今さらながら、この個性豊かな40人をお世話してくださった平澤先生、野田蓮子先生、村上睦子先生には感謝するばかりです。

臨床での出会い

卒業し福島赤十字病院に戻ると、1年間は分娩介助に明けくれました。当時は秋山名誉院長が副院長と産婦人科部長を兼務し、その名声のもとに多くの産婦さんが集まっていました。分娩も年間1000～1100件近くありました。秋山先生は「お産の神様」といわれ、多くの患者さんから慕われていました。

先生は「助産婦としてどう判断するか」が口ぐせで、つねに助産婦に対して教育的指導をしてくださったことにはとても感謝しています。看護面では午来和子副看護部長にいろいろご指導いただきました。感性を磨くこと、個別指導の大切さ、専門的知識を深めること以外に、助産婦として社会的知識を持ち判断を評価できることの大切さな

ど、つい慣れで仕事をしてしまうなかで、自己研鑽の大切さを教えていただきました。

これから

いつの間にか私も指導する立場になりました。現代の若者気質を理解し、各々の助産婦の個性を大切に育てあげることがこれからの課題と考えています。

分娩はひとつのイベントであり、設備の充実やサービスを多く求められています。総合病院という限られた条件の中でいかに満足した分娩をしてもらうかは、そこに働く助産婦のケアの充実や指導力にかかっています。当院では産後のフォローに力を入れており、退院後の哺乳量チェック、母乳外来、新生児訪問を実施しています。里帰りをしなくなった夫婦が増える中、助産婦の早期の家庭訪問は大切なことであり、どんどん地域への活動の輪を広げる大切な機会といえます。

仕事をしていて気づくことは、助産婦の業務を理解してくれている患者が少ないことです。助産婦はもっと柔軟性をもって助産婦業務の拡大を考えるべきであり、助産婦の活動をアピールする努力をすべきと考えます。

今回は私の看護学校の同級生で、現在は日本赤十字医療センター健康棟5階の婦長として活躍している貴家和江さんにバトンタッチします。つねに落ち着きと包容力のある貴家さん、よろしくお願いします。